62nd GALAXY AWARDS ギャラクシー賞贈賞式

放送評論家、ジャーナリスト、メディア研究者などが参加する放送批評懇談会がテレビ・ラジオの素晴らしい作品や活動、関わった人や組織を顕彰するギャラクシー賞は、放送関係者から「最も欲しい賞」とも評されてきた。その第62回の贈賞式が、6月2日に東京都内で開催された。

YouTubeでのライブ配信もすっかり定着し、会場に集まった約600人に加え、ライブ配信で視聴した約8000人が式を見守った。

今回、参加した各部門の作品は、CMが335本、ラジオが113本、報道活動が29本、テレビが414本。すでに発表されていた入賞作が部門ごとにステージ上で表彰された。さらにその入賞作のなかから、その場で優秀賞、大賞作品が発表され、トロフィーの「バードマン」が贈られた。

個人賞、DJパーソナリティ賞、特別賞、志賀信夫賞、フロンティア賞、マイベストTV賞グランプリの受賞者もステージを飾り、喜びを表した。続く懇親会も大盛況で、祝福の声と、それに応えるたくさんの笑顔が会場いっぱいに満ち溢れていた。

テレビ部門

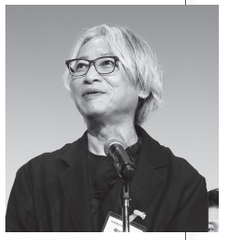
❖テレビ部門・大賞

「虎に翼」（NHK）のチーフ・プロデューサー尾崎裕和さん。受賞の喜びと関係者への感謝の言葉の後、「本当に戦いながら、一丸となって作り上げた作品」だったことや、キャスティングは初めから伊藤沙莉さんに決めていたことなどを語った。

脚本の吉田恵里香さんは「朝ドラは毎朝、長い時間をかけて、さまざまな人間や社会を描いていけるところが素晴らしいと思っていたので、自分が初めて朝ドラを書けたことも幸せでしたし、大賞をいただけたことも本当に嬉しく思っております」と述べた。主人公の常套句について、「私たちは雑談がすごく長いんですけど、日々の思いや怒りをぶつけあったりしながら、そのなかで自然に『はて?』という、少し柔らかいけれど力強い言葉が浮かびました」と明かすと、チーフ演出の梛川善郎さんも「出演者も含めて全員おしゃべりで、いろんなテーマについてああだこうだずっと喋って喋って、喋りながら芝居やキャラクターに落とし込んでいきました」と語り、息の合ったチームであったことを感じさせた。

演出の橋本万葉さんはオープニング映像について、「トラちゃんが法服を着て、その周りに同じように生きているたくさんの女性を表現して、みんなで歩いていこうというメッセージを込めました」と解説した。吉田さんは、また朝ドラを書くとしたら?という質問に、「テーマはともかく、この座組みでやれれば、パワーアップして帰ってこられるのではないか」と語った。

吉田恵里香さん



梛川善郎さん

❖テレビ部門・優秀賞

「テレ東スマッシュヒッツ」（テレビ東京）の総合演出を務めた田中晋也さん。テレ東の番組フォーマットを貸し出したメキシコ、スリランカ、モンゴルについて、「世界中に勝手に企画書を送り付けて、反応してくれた3国」だったと明かし、「日本のバラエティの評価が高く、安くできて面白いと言われました」。

「情報は誰のもの?」（RKB毎日放送）報道部記者の今林隆史さん。「電話しても訪ねて行っても、役所は答えてくれない。『答えない』ことも含めて、3年間放送しました。取り上げたゴミ処理施設は4月に稼働し始め、問題はまだ終わっていない。引き続き取材を続けていくつもりです」。

「題名のない音楽会」（テレビ朝日）プロデューサー・演出の鬼久保美帆さん。60周年企画について「指揮者の山田和樹さんは問いかけ、子どもは自分で考えて吸収しました」。「番組は常に第一線で活躍する演奏家のいい音を届けます。いい音を聴けば、いい耳ができて、いい音楽を楽しめます」。

ラジオ部門

❖ラジオ部門・DJパーソナリティ賞
大窪シゲキ

ステージに登場後、「これだけ多くのカメラマンの方がいらっしゃって、誰もシャッター切ってくれなかったらどうしようと思いましたが、よかったです」と沸かせる。4月に25周年を迎えた中高生応援番組「9ジラジ」（広島FM）の2代目DJだと自己紹介し、「DJさん、スタッフ、スポンサー、アーティスト、なによりリスナーさん（9ジラー）たち全員で取った賞。25年間頑張った方々に、会場の皆さん、大きな拍手をお送りくださいませ。いぇい！いぇい！いぇい！」と、“全員”という言葉に力を込めて、トロフィーを高く掲げた。

「このように認められて、悩んでいる10代たちに、頑張ってたら見てくれている人はいるよと伝えられたんじゃないかな。これからの時代を作っていってくれるんじゃないかな」と9ジラーたちにエールを送る。さらに被爆80年を迎える広島に来てほしいと会場に呼びかけ、「優しい気持ちで平和を祈ってくれたら嬉しいです。僕もラジオから発信していきます」と決意を示した。最後に「この配信を朝から楽しみにしてくれていた父ちゃん母ちゃん、『9ジラジ』のみんながいてくれたから親孝行できました」と語り、「9ジラーと一緒に取った賞です。広島で聴いているみんなに、もう一度拍手を」と呼びかけた。

左端写真、左から）広島FMの屋形英貴さん、竹下香織さんと大窪さん

テレビ部門

❖テレビ部門・特別賞
「バリバラ」

番組の顔を務めてきた出演者の玉木幸則さんは、「感無量です。障害の人が出てくると、頑張ってるねとか、かわいそうやねってステレオタイプの見方をされてたんですが、実は変な奴も笑かしてる奴もいっぱいおる。怒られたらすぐやめようって月1回で始まった企画だったのに、意外や意外、評判よくて、まさかの15年。どこに行っても街中で声をかけてくれる方がいっぱいいてね。だから、あなたがあなたのままで生きていっていいんだっていうことを、ぜひ他の番組でも伝えていってもらえたらありがたいなと思います」。

NHK大阪放送局チーフ・プロデューサーの森下光泰さんは「出演者の2枚看板がコテコテの関西人で、むちゃくちゃ関西の空気が番組に染み出ていた。特に玉木さんの『しんどいときはしんどいて言うたらええねん』というメッセージがいろんな人に届いたのかなと思います」。

テレビ部門

❖テレビ部門・個人賞
杉咲 花

黒一色のシックなロングドレスで優雅に登壇した杉咲花さん。

「こんな素敵な賞をいただけるなんて思ってもみなかったのでびっくりしましたが、神は細部に宿るということを信じてやってきた日々は間違ってなかったのかな、と思うとホッとしています。そんな、志を共に高め合えるような、純粋にいいものを作りたいという気持ちで集まった大切な仲間たちと出会えたことが、何よりの財産だと思います」と、言葉をゆっくり一つひとつ確かめるように受賞の思いを語った。

「『アンメット』（関西テレビ）はセリフの“てにをは”まで細かな精査を繰り返すような現場で、心と力の限りを尽くすプロフェッショナルが集まっていました。『海に眠るダイヤモンド』（TBSテレビ）では、理不尽なことに純粋な疑問を抱きながら自分の尊厳を守るために力強く歩んでいく活力のようなものを大切に演じられたらと思っていました」。

サプライズゲストとして登壇したのは「アンメット」のプロデューサー、米田孝さん。「第9話のラストで、杉咲さん演じるミヤビと三瓶先生（若葉竜也）が語り合うシーンは15分ほどの長回しにチャレンジしました。どうしたらこの対話にたどり着けるのか、杉咲さんともたくさん話してシーンを作り上げていったんですが、本当にミヤビがわれわれの世界と地続きで存在しているかのような、脚本でわかっているはずなのに、二人は何を話すんだろうかと思ってしまうような、そんなお芝居が本当に印象的でした」と熱く語った。

下左）会場の祝福のなかを歩いてステージへ
下中）米田さんから花束のプレゼント
下右）報道陣に笑顔で応える杉咲さん

ラジオ部門

❖ラジオ部門・優秀賞

冤罪で12年刑務所にいた女性の厳しい道のりと再審法改正を問いかけた**「20年目」**（CBCラジオ）。「本人のお声が力になると思い、番組で手紙を読んでいただきました。私自身、その肉声に胸打たれたのが番組制作の始まりでした」とテラ・プロジェクトのディレクター森理恵子さん。

原発と過疎を巡る能登の声を記録した**「ふるさとの亀裂」**（北日本放送）。「残っていた過去の音声を紐解くことからスタートした。復興はまだまだなので、皆さんの声をこれからもいちローカル局として全国に届けたい」と語る、ナレーション・取材・構成を務めた数家直樹さん。

「あの日に学ぶ未来への備え」（朝日放送ラジオ）は「大震災から30年だからこそわれわれ関西のメディアが必ず放送しなければと、編成担当として制作担当に声をかけて実現した」とディレクターの村田侑亮さん。「生放送でリスナーからたくさんの声をいただき、一緒に考える場になりました」。

❖ラジオ部門・大賞

「MANDAN」（九州朝日放送）プロデューサーの米嵜竜司さんは、「ラジオのレギュラーの生放送を大事にしたいと思ってやってきましたが、まさか、このようなすごい賞に選んでいただけるとは」と驚きの表情。番組中に高級炊飯器を買いに走り、スタジオで炊飯した生ワイドならではの一幕を語った。ステージに招かれたパーソナリティの二人。きょんちゃん（右端）は満面の笑みで、「ラジオパーソナリティになって19年、一番嬉しいです。やったー」と万歳。ハニーさん（右から2人目）は感激の涙を浮かべながら、「炊いたご飯は、生放送中3杯はいただきました」。

CM部門

❖CM部門・大賞

三井住友銀行のアプリで管理する口座**Olive**のプロモーションシリーズ**「通帳の人」**が説得型広告として評価され大賞に。執行役員の伊藤亮佑さんは「やはり紙の通帳が絶対に必要だと言う方がたくさんいらっしゃる。紙の通帳でなければ、紙の通帳だからこそ金額が証明できるといった固定観念を少しでもほぐせればと思いました」「紙通帳の方が不快に思われてはいけないので、キャスティングにいちばん気を遣いました」。

CMが奏功したのか、「2年目になって、アプリを使いこなしていなかったお客様の入会者を増やすことができました」と語った。

❖CM部門・優秀賞

キリン一番搾り糖質ゼロシリーズ。「糖質ゼロって興味のない人が多いのですが、つい見たくなる素敵な親子の世界観に、『糖質とおいしさは無関係』だとハッとする気づきがあり、気持ちよさや爽快さが伝わったのではないかと」と語るキリンビールのブランドマネージャー佐藤洋介さん。

大日本除虫菊のラジオCM**シンカトリ**。「古い蚊取り器から新しい蚊取り器に徐々に変わっていく流れを作りたくて、『**金鳥文庫**』という小説にしました」と宣伝部課長の小林裕一さん。ナレーションに玉城ティナさんを起用した理由は「雰囲気を持たれていること」だと明かした。

KDDIの**UQ親子応援割「#親子のスマホンネ」**は「一般の方のチャットを見せてもらい、言葉の裏に隠れているインサイトみたいな、家族間では繋がっているのを参考にしながら作りました」とKDDIの馬場剛史さん。SNSで親世代からも子世代からも共感のコメントが寄せられたと語る。

司会はDJパーソナリティ賞受賞者コンビの鬼頭里枝さんと森谷佳奈さん。今回の受賞者・大窪シゲキさんと記念撮影

報道活動部門

❖報道活動部門・優秀賞

東日本放送の**旧優生保護法 強制不妊手術をめぐる一連の報道**。記者でディレクターの髙橋直希さんは「1997年の被害者女性からの電話で取材が始まり、私は4代目。私が97年生まれなので、赤ちゃんがここまで大きくなる期間」がかかったと語る。「これで解決ではなく、歴史を検証していく必要も」。

関西テレビ放送の**刑事司法の壁に挑んだ検証報道**。記者の上田大輔さんは「マスメディアは逮捕報道は日々行うけれど、起訴後の“裁判の検証報道”は少ない。画がない、難解だ、双方の主張を公平に、などの壁を何とか乗り越えようじゃないかと独自取材し、映像表現を工夫しました」。

❖報道活動部門・大賞

「守りたい、だから 伝える」は阪神・淡路大震災30年の関西民放NHK連携プロジェクト。局の垣根を越えた7局がずらりと登壇。「震災30年でできた枠組みを今後もしっかり防災のために続けたい」とサンテレビの永谷和雄さん。読売テレビの佐藤翔平さんも「関西の局がNHKを含めて一緒に活動したのは初めてで、最初は出し抜き合いがあるかもとか考えながらスタートしたんですが、命を守るために全局が動き、できることをすべてやる。その枠組みが最終的に形になり、今は考えはみな同じで絶対に一人でも多くの命を守る。そういう思いを一緒に、これからも活動を続けていけるのは本当に嬉しい」と力を込めた。

トロフィーを手にしたサンテレビの永谷さん（左写真）。賞状を贈られたNHK藤島新也さん（右写真・左端）と毎日放送、朝日放送、テレビ大阪、関西テレビ、読売テレビ（順不同）の皆さん

志賀信夫賞

中村耕治　南日本放送相談役

「多くのメディアが出現し、ローカル局が中途半端な存在になっていく不安に駆られ、地域に根を張っていこうと横へのネットワークを広げてきた」。中村さんは、「規模の小さいコミュニティFM、CATVなどにも多くを学びました」と謙虚に語る。「地域社会がどんどん縮んで先行き不透明だが、地域に軸足をきちんと置き、それぞれが多様なネットワークを作っていくことが先の道を開いていくのではないか。地域メディアはまだまだ発展途上で、放送のジャーナリズム力を出し切っていない。私自身がやりきっていないと忸怩たる思いを込めて言うのであります。今回の賞は、まだこれからだぞ、というローカル局、地域メディアに対する激励だと思います」。

新潟放送の佐藤隆夫会長が中村さんの言葉を社長室に掲げていると聞き、照れた中村さん。そして盟友であるケーブルテレビ局のGoolight丸山康照社長からは花束が贈られた。

フロンティア賞

radiko

賞状を受けたのは岡田真平取締役（左写真・左）。「2010年に難視聴対策、新たなリスナーの獲得を目指し、サイマルで聴けるサービスから始まったradikoは、その後全国で聴けるエリアフリー、放送を1週間遡れるタイムフリー、2024年にはポッドキャスト、30日遡れるタイムフリー 30のサービスを提供してきました。これらのサービスの実現はすべてのラジオ局の皆様がラジオの新たなフロンティアを拓いていこうという強い思いで一緒に進んでくださったおかげです」。

トロフィーを手にした椎名剛史プロデュースチームリーダー（左写真・中）はradikoと従来のリスナーの違いを聞かれ、「radikoは深夜番組を翌朝、出勤しながら聴くとか、リスナーさんのライフスタイルに合わせてお楽しみいただいてます」。掛原雅行テクノロジー推進室長（左写真・右）も「radikoが車の中で快適に聴ける環境整備を進めています。ご期待ください」と語った。

マイベストTV賞グランプリ

テレビ東京　ドラマNEXT「ひだまりが聴こえる」

プロデューサーの加瀬未奈さん（左写真・左）は原作との出会いを語り、「難聴と同性愛、二つのマイノリティを描くだけに困難の連続でしたが、キャスト、スタッフの皆様が並々ならぬ覚悟で挑んでくれました」。監督の八重樫風雅さん（左写真・右）は「原作の優しさ、温かさみたいな空気感を大切にしたいと思いました。撮影前に難聴や聾の方やノートテイクしている方のお話を聞きましたが、特に印象に残ったのが、難聴の学生さんがおっしゃった『言葉って命なんです』。本当に命を扱うように言葉を扱って制作しました」。

視聴者から選ばれたプレゼンターより賞状とトロフィーが手渡され、福祉関係の仕事に携わるプレゼンターからは、「誠実に伝えようという熱量を感じました」との言葉が贈られた。

文／飯田みか　写真／岩尾克治、官野 貴、花井健朗、船元康子